

俳句と異文化理解

北 端 辰 昭

1. 俳句と社会学のコラボの試み

2004年に実施したインドネシア駐在員・帰国者対象の社会調査において、駐在期間とインドネシア文化理解度との大まかな相関性を調査し、一定の成果を得たところである（資料No.1, 2）。通常、駐在期間は一期3～5年といわれる（調査結果ではインドネシアでは平均4年4カ月）。帰国時点の異文化理解（受容）レベルは、回答者120人のうち65人（65%）が、下表の8段階の5～6レベル、即ち「文化差異の発見と自国文化の再認識」と、「異文化に対する共生・共感感情の体感」のほぼ中間レベルに達していることが判明した。これは帰国時点において、駐

在員がインドネシア社会をトータルとしてどの程度理解できたかという、アバウトな評価を聞いたことになる。しかしながら異文化の価値観が分かる、分からないというのは、異文化情報たる個々のトピックの内容如何によっても、また異文化に対する知的関心の深さによっても、その価値観は多義に分かれる。句会において「この俳句は分かるが、こちらの俳句は分からない」ということがよく言われる。俳句表現の巧拙さも勿論あるが、読者側に詠まれた俳句に対する共感性の有無によることが多い。異文化が分かる、分からないというのは、俳句のような共感性に通底するのではないか。これがこのエッセイの問題意識である。

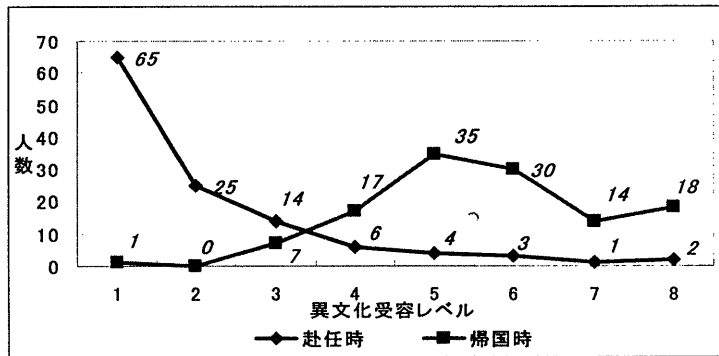
（資料No.1）「駐在期間と異文化理解レベル」（120人回答）

レベル	異文化理解過程（体験仮説）	駐在期間（同仮説）	調査結果
1	カルチャーショックを体験 ↓（↑）	（赴任早々）	
2	現地語が分かり始める ↓（↑）	（半年？）	赴任時のレベル （2.0）
3	現地生活と勤務環境に慣れる ↓（↑）	（約1年？）	↓ 駐在期間
4	異文化に対する学習 ↓（↑）	（早くて2, 3年？）	（4.4年）
5	文化差異の発見と自国文化の再認識 ↓（↑）	（4, 5年？）	↓ （5.6）
6	異文化に対する共生・共感感情の体感 ↓（↑）	（5, 6年？）	帰国時のレベル
7	相手との相互啓発が可能 ↓（↑）	（10年以上？）	
8	相互理解の意義を体感	（15年以上??）	

出所：北端辰昭「異文化接触研究その1」（『仏教大学大学院紀要35号：2007/3）

：駐在期間平均4年4カ月前後の駐在員の異文化理解レベルは5～6レベルであった。

(資料No. 2) 「赴任時と帰国時の異文化理解(受容)レベル」: 数字は人数



出所: 前記に同じ: 帰国時には回答者120人中65人が5～6レベルに達している。

2. 何故自句を分析対象として 取り上げたのか

そこでケーススタディとして、筆者のインドネシア生活句文集『潜水』中のトピックスを例にとり、それに対する価値観評価を試みる。俳句と社会学の実験的なコラボ作業であろう。ならば何故主観的な自句を分析対象として取り上げたのか、それについてあらかじめ釈明を行う必要があろう。俳句はたった十七文字(音)に凝縮表現された定型詩歌である。小説のように雄弁に語られる文学ではない。加えて俳句には背景説明はつけないのが原則である。また作者はそれを語らないものである。読者は凝縮された表現を読み解くことになる。読み解き方に定式らしきものはない。季語が作者と読者を繋ぐ暗号のような働きをする。俳句の特徴は、凝縮表現と鑑賞の多彩性にある。約400年も前に詠まれ、これまで鑑賞され尽くしたとみられる芭蕉(1644～1694)の名句、「古池や蛙飛び込む水の音」に対しても、まだ新しい鑑賞解釈が出てくる。背景解説をつけた句集は極めて少ない。よって作句の背景や動機は作者に直接聞く以外にないのである。加えて外国の異文化生活を詠んだ句集は極めて少ない。外国で俳句を詠むというのは、異文化そのものを詠むことを意味す

る。ここにインドネシア生活を詠んだ拙著句を取り上げ、自身で分析を試みる大きな理由がある。拙著の英語対訳『潜水』(2002 永田書房)は、日米二人の文学者の共訳による英文解説をつけて上梓した。縦文字詩歌の横文字詩歌への翻訳配慮である。これは師事した故山口誓子(1901～1994)の英文集『The Essence of Modern Haiku』(1993: Mangajin, Inc. Atlanta 社)に倣ったものである。なお『潜水』100句の90%以上は、再赴任時(1994～1996年)の朝日新聞アセアン地域版アジア俳壇の入選句である。

(選者: 天為編集長対馬康子, 天為主宰者: 有馬朗人元東大総長・元文部科学大臣)。

3. 異文化理解の端緒

通常、駐在員は仕事あるいは生活における、印象的なトピックスを通じて、そのトピックスの持つ「意味」と「価値観」を観察することになる。トピックスに対して「何故?」という素朴な疑問から異文化問題は始まる。筆者は赴任当初時に盛んに「何故?」を繰り返し、前任者や周辺を困らせていたようである。最初はトピックスに戸惑い、あるいは否定的感情を抱くことが多い。時間の経過とともにその背景が分かるようになり、次第にその価値観を理解できる

ようになる。その心理的過程において、自文化の価値観と相手文化との価値観との相克感情が交錯する。その反復と往復を繰り返す。恐らくトピックスに対する価値観の評価は流動的であろう。

文化人類学者の青木保さんは、異文化社会におけるこのようなトピックスを、自然レベル、社会レベル、象徴レベルの三種類に分類している。「自然レベルとは寒くなれば衣服を着る、おなかがすけばご飯を食べるというような生理的な状態であって、どんな文化を通して変わらない人間の基本的な条件を、社会レベルとは社会的な習慣とか取り決めに知らないと、文化を異にする相手も社会そのものを理解できないという条件を、象徴レベルとは、外部の者には極めて理解するのが困難な世界、その価値とか意味を共有している人間にしか分からない世界を指している。象徴レベルはその国の社会や国の重要な価値観を担っていることが多い。この三種類が総体としての異文化を形成している」（『異文化理解』（岩波新書））。自然レベルのコミュニケーションは、ボディランゲージで70～80%程度まで交流が出来るといわれている。これは筆者の乏しいインドネシア語でも、家事使用人とのコミュニケーションは取れていたので実感としてよく分かる。日常生活ではこの自然レベルの交流体験が多い。社会レベルとは、例えばインドネシア特有の社会現象ともいえるべき「約束時間がゴムのように伸びる問題」や、「蔓延する賄賂文化問題」などがこれに相当するだろう。象徴レベルとは、例えばイスラム教徒の「戒律や習慣」がこれに相当するだろう。インドネシアは世界最大のイスラム大国である。象徴レベルを文化レベルと言ってもよいと思われる（以下「文化レベル」という）。駐在員はこれらの三種類のレベルのトピックスの見聞・観察体験を通じて、その価値観を観察することになる。悩ましいのは社会レベル、特に文化レ

ベルの価値観であろう。

4. 異文化体験の4類型

ベルギー人で仏教大学教授場知賀礼文さんは、長い日本生活体験を踏まえて、異文化体験を次のように類型している。「異文化体験におけるトピックスとは形のあるもの、映像あるいは一定のイメージを利用した表現内容である。価値観とは目で見えないもの、モノと人間の本質、その心を表わした理念である。トピックスと価値観との関係性を類型化することは、異文化体験の整理と理解に繋がる」として、以下のように4類型している（同教授の退官最終講義「象徴と価値」2006/1/21）。なお括弧内にプラスイメージあるいはマイナスイメージと付しているのは筆者の注釈である。

- ① 初めて見たときにも驚かない体験。この経験は等しい価値観を意識した場合に得られるケース（プラスイメージ）。
- ② 初めて見て感銘する経験で、自分の価値観が強化されるケース（プラスイメージ）。
- ③ 初めて見た時、驚いてカルチャー・ショックを経験するタイプ。このカルチャー・ショックは事物の形、その象徴性を理解できないときに起こるケース（マイナスイメージ）。
- ④ もう一つのタイプの異なるカルチャー・ショック。これは人が価値観においてなにかの矛盾を感じた場合に起こる。つまり自分の価値観と相手の異文化価値観が矛盾するときのショックを受けるケース（マイナスイメージ）。

前記の青木説が外形面からトピックスを分類しているのに対して、場知賀説は心の内面から異文化体験を分類している。試みに青木説と場知賀説を縦横に組み合わせ、トピックスと価値観との関係性を筆者のインドネシア生活俳句

に引き付けて考えてみる。

5. 象徴と価値観

そこで前記の『潜水』から自然レベル、社会レベル、文化レベルに該当する6句を抜き出し、場知賀類型の①～④の何れに該当するか分析してみた。100句の中には①～④に分類しがたいグレーゾーンの句も多い。

- a) 最初の句のトピックスは「夕焼け」である。前記の青木分類では自然乃至社会レベルに該当する事例であろう。筆者がジャワ島でもっとも感動を受けた情景句である。1987～1989年頃のジャカルタ郊外ブカシの、勤務先の研修所近くの夕景である。ジャワ島の大地は陸上競技場のアンツーカーのような赤色をしている。知人（農林省）の話では大地は鉄分が多く、酸化しやすいということであった。その赤い大地は夕焼けでさらに独特の色に染まる。その光景は自分の俳句美学の価値観がさらに強化されたケースに相当する。前記の場知賀類型の②「初めて見て感銘する経験で自分の価値観が強化されるケース」に該当すると思われる。

牛を曳き大夕焼けの野を帰る

Leading a buffalo home from the fields
at tropical sunset

While in Java, I was greatly moved by this scene. The sunset glow in this land is a very special, making the earth as red as an athletic field. The boy slowly walked home leading the buffalo. This took place in Bekasi city, formerly on the outskirts of Jakarta, but now part of the city.

- b) 次の句のトピックスは「叱咤されている牛」である。牛はジャワ語が分かるのか？この句集で人気の高かった俳句である。これも自然乃至社会レベルの事例であろう。牛は日本の牛と同じように農夫に「おう、おう」とジャワ語で尻を叩かれていた。昔の日本の農業風景、田搔牛を彷彿させるものがある。当初からプラスイメージの価値観であって、①の「初めて見たときにも驚かない体験。この経験は等しい価値観を意識した場合に得られるケース」に該当すると思われる。評価は今後多分変化することはないだろう。

田を搔ける牛はジャワ語で叱咤され

Plowing a rice field the cow is scolded
in Javanese

This was my first haiku to be selected by an Asahi Haidan (Ashia Haiku poet group of the Asahi Newspaper). It was the most popular one in my Haiku book 「Coral Reef」, my first collection. Does this bring memories of how Javanese used to farm? Does the cow understand Javanese?

- c) 次の句のトピックスは「濁った川」である。ジャカルタの片隅に汚れた川で髪を洗う生活もあった。こういう生活が大都会の片隅にあるのを見ると、胸が締め付けられた。社会レベルの事例であろう。途上国では経済成長と公害の関係、そして富者と貧者の関係もトレードオフの関係にある。これは④の「もう一つのタイプの異なるカルチャー・ショック。これは人が価値観においてなにかの矛盾を感じた場合に起こる。つまり自分の価値観と相手の価値観が矛盾するときのショックを受けるケース」に該当すると思われる。今でも

「濁った川」に対するマイナスイメージは変わっていない。JICA 専門家として、中小企業振興対策に従事していた者にとっては、「濁った川」を見るたびに複雑な思いが去来した。

糞流る濁るる川で髪洗ふ

Flowing excrement a woman washes her hair in the muddy water

A girl washed her hair in the river, which even carries excrement. I felt sad when I saw such thing. In developing countries, there is a trade-off between economic growth and pollution, wealth and poverty.

d) 次の句は筆者がもっとも強烈な印象を受けたイスラム信仰句である。そのトピックは「炎天下の大地で祈る人」である。文化（宗教）レベルを表す事例であろう。祈っているのは唯一絶対神のアッラーに対して疑いのない、敬虔な信仰を持っている人であろう。暮らしの中に宗教があるというよりも、宗教の中に暮らしがあるといってもよい。宗教的にいい加減に生きてきた筆者にとっては、この光景は新鮮な衝撃であった。筆者は彼の信仰姿勢に共感し、プラスイメージの価値観を感じたのである。前記②に該当する。これもプラスイメージであって今後も変化することはないだろう。

炎天下メッカに向かひ地に祈る

Under the blazing sun praying toward Mecca heads touching the earth

God truly exists for the people dressed in white who prayed with their heads touch-

ing the earth. Japanese were greatly impressed whenever they saw this. One weak point of the Japanese people is lack of a religious spirit. Isn't it important to work hard and be religious at the same time? We ought not to be nonchalant about the Oum Incident by a radical religious group.

e) 逆に次の句のトピックは血なまぐさい「犠牲祭」である。これも文化（宗教）レベルを表す事例であろう。筆者は当初、幼い子供に屠殺儀式の見物を許すインドネシア人の倫理観に対してマイナスイメージの③の「初めて見た時、驚いてカルチャー・ショックを経験するタイプ。このカルチャー・ショックは事物の形、その象徴性を理解できないときに起こるケース」に分類していたと思う。しかし犠牲祭はメッカに巡礼し、ハジになられたことを祝う習慣、寄進された家畜の肉を近隣者に分け与えるという、その宗教的な意義が徐々に分かってくると、時間の経緯とともにマイナスイメージは、次第にプラスイメージの①に揺れ動いた。今ではプラスイメージ①である。

氷菓嘗め幼な瞳も屠殺見る

Licking ice candy children's eyes also observed the slaughter

Many young children were watching the sacrificial ceremony. I wondered what they thought of the blood-covered livestock. They were usual a peaceful people, but their nation's beginnings were bloody. Children should not be allowed to see this ceremony.

f) だんだん価値観評価が厳しくなる句が登場する。次の句では俳句の凝縮表現性から「盲」「癩患」「乞食」などの「俗語的、差別的言辞」を用いていることを、あらかじめお断りしたい。本意ではない。トピックは「癩病患者?」である。赴任早々のことであつたかと思う。炎暑のジャカルタの住宅街、手足に包帯を巻いた「癩病患者?」らしい老人が金を乞いつつ歩いていた。目も不自由らしい? 思わず車を止めて小銭を与えた。日本とインドネシアの医療格差は歴然としている。日本では完全に社会復帰が可能な伝染性の弱い病気である。その日の食事は進まなかった。類型では③の「初めて見た時、驚いてカルチャー・ショックを経験するケース」に該当したと思う。寮の食事でこのことを話すと、先輩の一人は、『それは多分芸達者な「乞食」に違いない。10年前までは「癩病患者?」は街中にいたようだが、今はもういない』と笑われた。観察を続けると、目の不自由な老婆とその手を曳く孝行息子、赤子の尻をひねって泣かせる母親、血のような包帯を巻いた交通被害者、怖い女装の男など、街のあちこちの決まった場所に、決まった「乞食」が達者な演技で金を乞うているのに気がついた。目には妖しい吸引力があり、目を見ると負けである。小銭をひたたくように取り、貰ってもありがたうとも言わない。相互扶助精神を逆手に取った、哀しいビジネスなのでは? と思うようにもなった。当初のプラスイメージから、マイナスイメージの③へと、価値観が大きく揺らいだのである。その後は「乞食」を見るたびに、その演技をじっと観察する習性がついてしまった。

炎ゆる道盲（めしい）癩患（らいかん）金を乞ふ

A burning road a blind leper asking for

money

In Jakarta's summer heat, his hands and feet bandaged, a beggar—a leper, perhaps—was asking for money in wealthy neighborhoods. His eyes looked bad, too. Without thinking I stopped my car gave him some coins. Indonesian's medical service are quite different from Japan's. I had no appetite that day.

6. 『潜水』句の分析から

以上『潜水』句を分析材料として、トピックスに対する価値観評価を行った。俳句はもともと内省的・主観的な感性が表現された市民文学であるので、質的分析には適さないともいえるが、これによって以下の知見を得たことも確かである。

① 6句の分析手法と同様にして、『潜水』100句（うち88句はインドネシア生活句、12句は一次帰国時の国内句と中国・大連視察句）を縦横のマトリクス表に分類整理した下表（資料No.3）。横軸に青木3分類を、縦軸に場知賀4類型をとり、該当する俳句をそれぞれ挿入・整理した。

② この表から筆者の『潜水』の関心領域は、非インドネシア句の12句を入れても、社会レベルを詠んだ俳句が60句ととっても多く、異文化社会に対する関心が高いことが分った。文化レベルが21句、自然レベルが19句となっている。文化レベルも意外に多い。これはイスラム文化に対する関心であろう。4類型の価値観分類では、プラスイメージ句（①+②）が全体の67句も占め、マイナスイメージ句（③+④）はその1/3の21句にすぎない。全体としてはマイナスイメージ句を詠むこと

(資料No. 3) 「句集潜水100句の価値観分析表」

		青木・トピックスの3分類			
		自然レベル	社会レベル	文化レベル	合 計
場 知 賀 ・ 価 値 観 の 4 類 型	① 初めて見たときにも驚かない体験。この経験は等しい価値観を意識した場合に得られるケース	14句	11句	1句	26句
	② 初めて見て感銘する経験で自分の価値観が強化されると考えられるケース	4句	27句	10句	41句
	③ 初めて見た時驚いてカルチャー・ショックを経験するタイプ。このカルチャー・ショックは事物の形、その象徴性を理解できないときに起こるケース	0句	6句	7句	13句
	④ もう一つのタイプの異なるカルチャー・ショック。価値観においてなにかの矛盾を感じた場合に起こる。つまり自分の価値観と相手の異文化価値観が矛盾するときのショックを受けるケース	0句	7句	1句	8句
	非インドネシア句（国内句と中国句）	1句	9句	2句	12句
	合 計	19句	60句	21句	100句

を避けている。共感を抱くことの多かった自然レベル19句のうち18句がプラスイメージを抱いている。芭蕉以来、俳句は主としてプラスイメージの「花鳥風月」を主対象に詠い続けられてきた歴史がある。マイナスイメージの社会現象は詠みにくく、俳人はこれを敬遠するという傾向がある。これは筆者のような伝統俳句系俳人に恐らく共通する傾向かと推察される。しかしながら「花鳥風月」や「有季定型」に必ずしもこだわらない現代俳句系俳人にあっては、この傾向は少ないかと推察される。勿論これは今後の分析検証が必要であることは言うまでもない。

- ③ 象徴と価値観を繋ぐ車軸は何であろうか。自然レベルのトピックスは、赴任早々でもなんとなく分かるとしても、社会レベル、特に文化レベルのトピックスになると、その背景や価値観はよく分からない。恐らく当初段階では③ないし④の体験、つまり「何故?」という疑問を感じ、マイナスイメージをい多くが多いと思う。筆者の体験ではどちらか

といえばマイナス評価がプラス評価に転化するケースが多く、プラス評価がマイナス評価に転じるケースは少なかったと思う。多分インドネシア社会に対する理解度が駐在期間とともに深化したこともあろう。要するに仕事や生活環境、異文化に対する知的関心、インドネシア（人・社会・文化・宗教）との相性などの如何にもよる。つまり事前知識の有無、現地研鑽体験の深さ、駐在期間の長さ、勤務・生活環境要因などのトータル性が象徴と価値観を繋ぐ車軸になるのではなかろうか。

- ④ 俳句の鑑賞と評論活動は伝統的に市民文学の観点から行われてきたので、ややマンネリ化した観もある。そこで横軸と縦軸の項目を他の分析テーマに、入れ替えてみてはどうだろうか。例えば横軸に宗教、市民文化、若者文化、伝統文化行事、歴史、自然（動物、植物）、政治・経済・法律、地域別、時代別など、社会学が関心を示すテーマを挿入し、縦軸に地方独特の地貌季語、あるいは前記の青木3分類、場知賀4類型などを挿入すること

により、社会学と市民文学がクロスした新しい俳句分析も可能であると考える。前記の故山口誓子は初期句集において、「メーデーの朱旗奪られじと荒るるものを」（1933『黄旗』）、『夏の河赤き鉄鎖のはし浸る』（1937『炎昼』）など、一見左翼的とも見られる社会性の高い俳句を発表し、社会派俳人と称されていたこともある。句集だけでも16冊にもなる膨大な句業を経て彼の遺句集（1994『大洋』）の「一輪の花となりたる揚花火」が辞世句とされている。この辞世句は伝統的俳句そのものであろう。このように俳人の初期句集と晩年句集との関心テーマ比較、句集別比較、あるいは集団としての結社間の関心テーマ比較、地域間の地貌季語の比較分析などに、上記手法を応用することが可能であろう。俳句を青木説の自然、社会、文化レベルに基づき三分類することにはさしたる支障は無いが、場知賀説の4類型では当てはめにくい事例が出てくる。トピックスは外界から観察できるが、価値観は心の問題である。故に価値観評価がプラスイメージ、マイナスイメージのいずれにも属しがたい中間事例も多い。類型範囲をもう少し緩めてもよいと思われる。

7. 異文化理解と感情移入

再び本論の異文化理解論に戻る。トピックスは、一つ乃至複数の異文化背景、つまり両国の社会・文化・風土・宗教差異などを濃厚に投影している。次表は回答者の意見、筆者の勤務・生活体験などをもとに作成した「両国の文化の森対照表」である（資料No.4）。貸借対照表をヒントに作成したものである。赴任前にこれらの国情概要、特にトピックスの意義を一次的に知っている場合と、現地に赴任してから始めて知るのでは、価値観が分かるまでの時間的ギャップは大きい。言葉が分からないために、あるいはインドネシア人との生活交流体験が少ないために、情報の投影性に全く気がつかない場合もある。中には鈍感な人、異文化に対して傲慢な人もある。トピックスは無言で我々に働きかけて来るのでこれに無関心であってはならない。それをどう受け取り、読み解くかが異文化理解の鍵に繋がる。異文化に対する柔軟な理解（受容）姿勢がないと、摩擦を起こしやすく、仕事の成果も上がらず、現地生活を楽しめない。経済や産業技術に格差があっても、文化に格差はない。文化を相対的に観察する姿勢が肝要であ

（資料No.4）「両国の文化の森対照表」

	日 本	インドネシア
国情・自然	小さな島国≡まとまりのある国 同質性が高く単一言語的国家で情報の伝達性が早い。経済発展が早い 外交の下手な経済大国・工業国 四季がある 稲作は一期作・田植に時期制約	世界最大の島嶼国家≡まとまりが課題多様性・多部族・多言語国家で情報の伝達性が悪く経済発展には時間が必要 外交の上手い資源大国・農業国 乾季と雨季（平均気温28度） 稲作は多期作・田植は年中可能
社会	高学歴社会（大学全入時代の到来が近い。大学進学率は50%超） 権力格差が小さい社会 公務員のモラルは比較的高い 出る釘は打たれる。アイデンティティが弱い 根回し・稟議制社会	学歴格差が大きい（中学までが義務教育になったのは約10年前、大卒は5%・金の卵） 権力格差が大きい社会 汚職文化が蔓延（公務員の低賃金） 多部族社会でアイデンティティと自己主張とアピールがうまい ムシャワラ（話し合い）の伝統

経 済	国民の80%が中流意識をもつ 物造りがうまく標準化が徹底 中小・中堅企業が発達、世界に冠たる中小企業政策 期限・納期・品質の遵守観念が強い 正確・精密なJRの時刻表（工業時間）	所得格差の大きい階層社会である 模倣はうまいが、標準化は苦手 一群の大企業と零細企業（99.3%）に二極化、華人系が経済(流通)を支配 期限・納期・品質の遵守観念はおおらか 時間はゴムのように伸縮（農業時間）
文 化	異文化対応問題に不慣れ 意思決定はボトムアップ型に近い 生真面な会社型人間が多い 縦文字文化で英語は下手、日・イ両国語の一部に類縁性がある 織物・染色・民謡・稲作などインドネシアの伝統文化と類縁性がある	多部族社会で異文化問題は日常化 意思決定はトップダウン型 明るく、のんびり型の人が多い 横文字文化、インドネシア語は英語よりやさしい。 概して日本人より英語がうまい 洗練された舞踊とガムラン音楽。木彫文化や染織文化が発達。親しみやすい名曲・名歌が多い。
宗 教・ 倫 理	神仏習合の多神教的社会 イスラム教徒は極めて少ない 宗政分離が徹底 信仰心が乏しい、信仰より仕事 喜捨の精神が希薄 相互扶助精神が弱い 金品貸借のモラルが厳しい	国民の87%がイスラム信仰で重層信仰 世界の四大宗教が存在 宗政融合、宗教による部族間対立 信仰と生活が一体化、仕事より信仰、 ザカート（喜捨）はイスラムの義務 相互扶助精神が発達 金品貸借は相互扶助精神の発露か

注：北端辰昭作成「異文化接触研究その2」（仏大社会学31号：2007/3）を修正加筆

ろう。それには赴任前研修などでの事前情報の習得と、現地での研鑽活動の積み上げが何よりも重要である。

8. 「知る」と「分かる」

既述したように、句会において「この俳句は分かるが、こちらの俳句は分からない」とよく言われる。「分からない」というのは、勿論俳句表現の巧拙さもあるが、読者側に詠まれた俳句に対する共感性がないことが多い。異文化が分かるというのは、俳句のような一種の感情移入、あるいは共感性と通底する。これは筆者の体験仮説である。帰国後の国際見本市会場勤務で得た職業体験の一つは、「知る」と「分かる」の大いなる体験差異である。産業イベントは市場情報あるいは新商品・新技術情報を、五感（見る・触れる・聴く・感じる・食べる）で確認するビジネス情報交換の場である。イベントクリエイターの平野暁臣さんは、トルコでのイ

スラム体験と、産業イベントにおける空間体感との通底性について次のように語っている。「コーランが聞こえた途端に、人々の表情は微妙に変わる。会話の呼吸、目の動き、歩くリズム、コーランが流れている間だけどこか違う。別のことをしていても脳味噌が勝手にコーランに反応している。その変化があまりにも自然でスムーズだったから、コーランが暮らしの中に溶け込んでいることがよく体感できた。必要な情報にアクセスさえできれば、誰でもとりあえずは知ることはできる。分かった！と感じるのは自らの身体を通り抜ける実感を得た瞬間だ。腑に落ちるという言葉がそれを見事に表わしている。腑に落ちるためには皮膚感覚を通した実感が必要である。その代表が産業イベントである。外からモノを見るのではなく、自分がその中に居るという臨場感、五感を動員して全身で触れ合う体感性、それは産業イベントが備える数々の性能である」（「E & C 展示会情報2003/12号」）。彼は都市空間におけるイスラムに対する

共感性を踏まえて、「知る」と「分かる」とを産業心理学的に区別している。ある時期に共通の職業体験を持った者として彼の指摘に共感を覚える。

9. 体感的理解

初期情報のトピックスを全く知らないと赴任現場では混乱する。赴任前研修などで初期情報の習得が大切である。そして「分かる」、「分かった」に到るのは、初期情報を経て、生活空間・勤務環境の中で、異文化の価値観を体感できた段階を指している。観念的理解ではなく、膚で感じる体感的理解、あるいは逆の忌避感情であろう。異文化体験と産業イベント体験に通底することは、初期情報と現場での臨場体験が一致して、自分の前に新たな世界を広げてくるような感覚と知見、体内の異物がずっと抜けていくような感覚に近い。勿論「知る」と「分かる」の中間に多段階の関所がある。その関所を行ったり、来たり往復する。場合によっては、理解し難い事例、前記の「乞食」句のような忌避感情が抜けない事例もあろう。

10. 個人差と環境差

前記の2004年の社会調査結果から、その人の生活・勤務環境によって、あるいは現地の研鑽体験などによって、異文化理解深化度の差異は大きいと推察された。例えば「インドネシアは嫌いだ」という女性は意外に多いが、逆に男性にはインドネシアファンが多い。家庭を守るこ

との多い女性にとっては、家事使用人とのトラブルに神経をすりへらすことが多いからだと思われる。加えて途上国特有の安全・衛生問題もある。これに対して男性は会社で人を使うのも、家庭に帰って使用人を使うのも、どこかに人事管理上の共通性があるからだろう。このように個人差と環境差によっても、赴任時代によっても、その価値観は異なる。またその評価は固定的ではなく、恐らく流動的であろう。つまり「犠牲祭句」のように、自分の異文化理解の深化により、次第にプラス評価に変化していくケースもあるし、その逆のケースもありうる。

11. 終わりに

以上エッセイの形を借りて、自作俳句の価値観分析の可能性を探ってみた。論点を整理すると、異文化理解とは、初期情報→現場体験→自他の文化の差異を体感→異なった価値観・信念・習慣の理解→異文化摩擦を乗り越えようとする理解姿勢にあるともいえる。勿論これらの諸段階が重なる場合もあり、段階区別が困難なケースもあり、単純ではない。それには一定の駐在期間が必要である。一過性の観光旅行は綺麗なところを駆け足で、その国の表面を見るだけで終わることが多い。異文化情報のもつ意味の深さや、情報の投影性は分かりにくい。異文化理解とはある程度の駐在期間を経て、異文化の体感性⇄価値観の理解性（プラスイメージ）⇄逆の忌避感情性（マイナスイメージ）に到達することと言えるのではないか。異文化理解とはよりすぐれて体感的理解であると考えらる。